(C)新潟日報社

社説

2018.7.20

Editorial

佐渡金銀山

「郷土の宝」さらに磨こう

郷土の宝に磨きをかけたい。

国の文化審議会は、2020年登録に向けた、世界文化遺産の新たな候補に「北海道・北東北の縄文遺跡群」（北海道、青森、岩手、秋田）を選んだ。

佐渡市の「金を中心とする佐渡鉱山の遺産群」は4年連続で推薦を逃した。

昨夏の文化審議会では、他の鉱山遺跡にない佐渡の独自性を打ち出すことを求められた。

候補の座は逃した。しかし、文化審議会の評価は決して低くはない。佐渡金銀山の価値が世界遺産にふさわしいと理解されるよう粘り強く運動を継続し、

それに応じ、近世の手工業技術や組織体制が受け継がれるなど西欧とは異なる鉱山開発の変遷を際立たせる一方、七つの資産を相川金銀山、西三川砂金山、鶴子銀山の3鉱山に絞り込んで臨んだ選考だった。

関係者や佐渡市民は残念な思いでいるだろう。だが、あきらめることなく仕切り直したい。

文化審議会は、3鉱山の位置付けになお課題があるとしながらも進展があると認め、「有力な推薦候補案件となり得る」としたからだ。

一段と磨きをかけるよう求めたといえる。より説得力のある推薦書案とするには何が必要なのか。次に向け、十分に分析するとともに対策を講じたい。

新たな候補となった縄文遺跡群は国の特別史跡である国内最大級の集落跡「三内丸山遺跡」（青森市）と大小の石を円形に配列した「大湯環状列石」（秋田県鹿角市）をはじめ17遺跡で構成される。

ただし、ここまですんなりきたわけではない。13年から5年連続で推薦が見送られ、昨夏の文化審議会では「顕著な普遍的価値」を、分かりやすく説明することが課題とされた。

このため地元自治体では、推薦書原案で縄文文化が1万年以上続いたことを強調し、4道県のリーフレットを統一するなど、全体で一つの資産であることをアピールした。

こうした工夫が実り、文化審議会の「推薦内容の検討状況が相対的に進んでいる」との評価につながったとみられる。

先ごろ世界遺産への登録が決まった「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」（長崎、熊本）の例もある。

15年に日本政府が推薦したが、国連教育科学文化機関（ユネスコ）の諮問機関に内容の見直しを促され、昨年、禁教期に焦点を当てた推薦書を提出し直したことが登録につながった。

世界遺産登録を巡っては、件数が増えてきたことなどから審査は厳しさを増しており、吟味を尽くした推薦書の提出が不可欠となっている。佐渡の取り組みにも反映させてほしい。

文化にしろ自然にしろ、世界遺産登録を目指すのは、先人から受け継いだ財産を保全し、後世に残すためだ。その運動は、かけがえのない地域の宝を見つめ直すことにもつながる。

不断の努力を積み重ね、次回こそ国内候補選考の壁を乗り越えてほしい。